

「水晶の夜」から六十年

国際文化学科 渡 邊 修

一九三八年十一月九日の深夜から翌々日の明け方にかけて、ドイツでは首都ベルリンをはじめフランクフルト、マグデブルクなど全土に及ぶ都市で、シナゴーグ（ユダヤ教会）数百と、ユダヤ人が所有する商店、デパート、倉庫、邸宅など約七千五百軒が、ナチ突撃隊（SA）の手で突如として放火、破壊、略奪された。ベルリンでは十二か所にあったユダヤ教会のうち九つが破壊された。この突然の襲撃で殺されたユダヤ人は約百名、逮捕され後に強制収容所に送られた者は二万六千人に及んだ。いずれもその日まで普通な暮らしをしていた人々だった。第二次大戦前夜の、しかもナチ・ドイツの人種差別政策が日増しに色濃くなりはじめた時期とはいえ、このように突然、大規模に国家権力が公然とテロ行動に出ることを多くのユダヤ人たちは予想だにできなかったようだ。路上に砕け散ったワインドー・ガラスの破片が夜目にもキラキラと光り輝いたことから、この暴挙が「クリスタル・ナハト（水晶の夜）」と名付けられ、ナチのユダヤ迫害、大虐殺（ポグロム、ホロコースト）の序幕となったことは、あまりにも有名な史実である。

この事件のきっかけとなったのは、その二日前にパリで起こったパリ駐仏ドイツ大使館のE・フォン・ラート書記官暗殺事件であった。

犯人はヘルシエル・グリュンシュパンと名乗る十七歳のユダヤ系青年。十一月七日午前、受付で面会手続きを終えた彼は部屋に通されるといきなり書記官に連発銃の銃弾を浴びせ、致命的な重傷を負わせた。

ヒトラーは一九三三年政権についてからしばらくは、内外の基本政策樹立に追われ、本格的なユダヤ人対策に力をいれ始めたのは三七年以降、とくに三八年からユダヤ系企業の強制接収や財産没収など経済活動からの締め出しや、ドイツ在住ユダヤ人の国外強制移住、追放などに関する条例、政令を發布した。グリュンシュパン一家はポーランド系ユダヤ人でハノーバーに住んでいたが、ヘルシエルだけはパリに住む叔父の家に寄宿していた。ところが両親がポーランドへ強制輸送されることを知った彼は、いたたまれずにこの暴挙に出た。これがナチに絶好の口実を与えたことは言うまでもない。ドイツ現代史専攻のミュンヘン歴史研究所H・グラムル教授の『帝国水晶の夜』（一九八九年ミュンヘン・ベック社）によると、十一月八・九日は十五年前のミュンヘン一揆記念日にあたり、たまたまヒトラーは八日には昔仲間や幹部たちをビヤホール『ビュルガーブロイ』に招き、集会を開いていた。翌九日は古い市役所ホールで晩餐会を催していたその席に、フォン・ラートの死が正式に報告された。首都ベルリンから飛んできたゲッベルス宣伝相はヒトラーの耳元で何事かをささやきあったが、その内容は列席していた他の人々には全く分からなかったという。ヒトラーが席を立った直後の午後十時頃、ミュンヘンのSA本部は全ドイツ支部に指令を発した。「フォン・ラートの復讐を！」の呼び掛けで始まるこの指令書に従って悪夢の一夜が始まったのだった。

今年（一九九八年）はその六十周年にあたり、記念日にあたる十一月九日にはボンやベルリンなどドイツ各地で、犠牲になったユダヤ人追悼のための特別集会が開かれた。ヘルツォーク大統領はベルリンの集会で「六十年前の迫害はドイツ史上最悪かつ最も恥ずべきもので、人間性や文明、礼節に対する打撃である。だからこそ我々は繰り返しの日のことを思い起こさなければならぬ」と強調した。また十月の総選挙で勝利し十六年ぶりに社民党政権を発足させたばかりのシュレーダー新首相も、ベルリンのシナゴークに姿を現わし「ドイツ人はすでに民主的に成熟しており、極右のスローガンに惑わされるようなことはない。この現在を未来につなぐのが私たちの仕事だ。そうなければ過去が再び繰り返されることはありえない」と述べたと報じられた。ところで、こうした記念行事やドイツ政府首脳部の発言によって、はたして「水晶の夜」の犠牲者ユダヤ人たちの怨念は癒され、惨劇の記憶に一応の終止符が打たれるのだろうか？さらにはナチが犯した犯罪行為がこれによって償われることになるのだろうか？

ドイツではすでに十三年前の一九八五年五月、第二次大戦終了後四十周年記念にあたって当時のワイツゼッカー大統領が「過去に目を閉ざすものは現在にも盲目となる」という名セリフを口にし、ナチが犯した罪は永久にドイツ人が肩に担わねばならない、と公けに「全面謝罪」した。このことはわが国でもマスコミで大きく取り上げられ、この発言で、日本と同じ敗戦国ドイツが、一足先にいわゆる「みそぎ払い」を終えたと考えた人々も少なくなかったようである。しかし歴史は、そう簡単に過去を精算出来るものではない。現にそのドイ

ツで、今日なおヒトラー・ドイツの政策の正当性を主張したり、少なくともナチ時代のドイツはドイツ民族の歴史の中では一過性の特異現象に過ぎず、本来のドイツ史とは区別して考えなければならない、と主張する人々が一部にあり、一方でナチの犯罪行為は無条件で悪と認め、徹底的に断罪し反省すべきだとする一般良識派との間に、いわゆる「ヒストリカー・シュトライト（歴史家論争）」を生んでいる。戦後ドイツのネオ・ナチ、極右団体の活動も相変わらずその根を絶たれることなく、小規模ながら一部地方選挙で議席を獲得している現実を無視できない。

今回「水晶の夜」六十周年記念日にあたって、ドイツ国民は改めて過去の悔悟と反省を余儀なくされた。とはいえ、ユダヤ人たちの胸中にはまだまだ大きな蟠りがあるようだ。ドイツ・ユダヤ人中央評議会のイグナツ・ブービス議長は、記念集会でのシュレーダー首相の発言に反発、今日のネオ・ナチ一派による脅威は現実の問題だと指摘しながら、ドイツ国内にみられる「知的ナショナリズムの拡散」を鋭く警告した。ブービス議長がやり玉に挙げたのは、今年秋の恒例フランクフルト国際図書見本市で一等賞をとったドイツの作家マルティン・ワルサーだった。ワルサーは受賞にあたって「まともな人間でアウシュビッツを否定するものはいない。しかしこう毎日のようにメディアが暗い過去を暴き出し恥をさらしてばかりいては、私だって抵抗したくなる気にもなる」と語った。そればかりか、目下懸案中の「ベルリン・ホロコースト記念碑」建設計画について、これぞまさしく「過去の恥辱の記念碑」だ、と批判したという。この記念碑はブランデン

ブルク門すぐわきの元ヒトラー總統官邸跡付近に建てられる予定で、数千本のコンクリート柱を並べた迷路のような建造物といわれ、一般ベルリン市民の間でも眉をひそめる者が少なくないようだ。この記念碑計画にはユダヤ系米人監督スピルバーグも加わっているようだが実際に着工できるかどうかは、来年連邦議会での正式な議決を待つことになっている。問題はユダヤ人へのこうした「特殊な感情」が何時になつたら完全に払拭できるのかであろう。

そもそもナチス・ドイツは、何故ユダヤ人をこれ程まで憎み、地上から抹殺しようと考えたのか。言い換えればユダヤ人は何故こうも悲惨な迫害を受けなければならなかったのか。歴史をさかのほれば反ユダヤ主義の根源は、キリスト教の誕生という宗教的な背景にあることが分かる。キリスト教が公認される以前のローマ時代でも、ユダヤ人たちは一神論を頑固に守り、ローマ皇帝の神格化を認めないばかりか帝政初期には敢えて反政府行動をとったため、民衆の間に反ユダヤ暴動や大虐殺が起こった。著名な米歴史学者G・クレイグ教授は「こうしたユダヤ人に対する敵意が西欧の生活の常態的な様相となつたのは、まさにキリスト教の発生と時を同じくしていた。キリスト教徒にとつてユダヤ人とは頑迷な民族で、イエスを約束されたメシア（救世主）とは決して認めようとしなかった」とその著『ドイツ人』（真鍋俊二訳、みすず書房）で述べている。

新約聖書のマタイ福音書二十七章25節には、イエス・キリストが罪を宣告され十字架にかけられる直前、ローマの総督ピラトが群衆（ユダヤ人たち）の前で手を洗い「この人の血について私には責任がない、

あなたたちが責任をとれ」と言ったのに対して、人々はみな「その血はわれわれとその子孫の上にかかれ」と答えた、と記されている。数年前、日本のテレビでも放映されたイタリアのドキュメンタリー映画『シウォー』（大虐殺）の中でも、トレブリンカのナチス強制収容所で生き残った人々の証言の中で、あるユダヤ教のラビが「ユダヤ人は何故こうした残酷な仕打ちを受けねばならなかったのか？」という質問に対して「われわれの先祖たちがイエスの処刑の際に、その血の報いをわれわれ自身が受けると言ったからです」とはっきり説明した場面が印象に残った。ヨーロッパ人、それも多くのキリスト教徒とユダヤ人たちの間には、心の奥底にいまだにこうした宗教上の垣根が根強く絡んでいるのか、と深く考えさせられたものである。

「水晶の夜」から六十年。二十一世紀を目前にして人知はクローン人間創造の段階にまで科学を発展させた。しかし人間同士が抱く憎悪、怨念の根源を除去できるような新技術は開発されていない。十一月九日という日付は、奇しくも一九八九年、東西ベルリン間の「壁」が市民たちの手で崩壊された日付でもある。この結果二十八年間分断されていた東西ドイツが、念願の統一を実現した。しかしそれから九年を経た今日、社会体制を異にしていた二つのドイツは、同胞国家の建設というバラ色の夢を実現できただろうか。むしろ旧体制を懐かしむノスタルジーが、相互理解と協力の足枷となっているようである。「水晶の夜」の教訓は、人間相互の不信感永久に根絶不能である、とでも言うべきだろうか。